

# 学術講演

7月18日(土) 16時~17時

## 「日本における SFTS の流行と最近の話題」

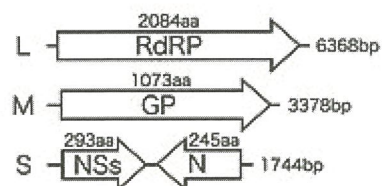
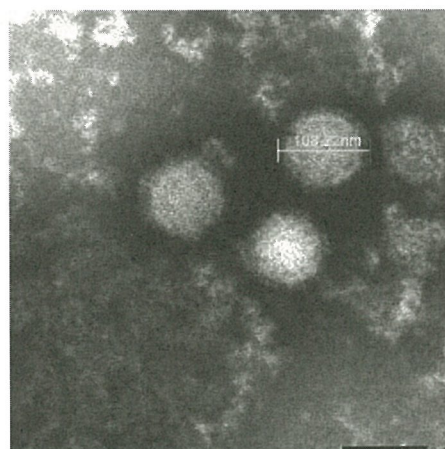
国立感染症研究所 ウイルス第一部 部長  
西條 政幸

司会

金子 心学 (前橋赤十字病院)、山田 隆 (長岡赤十字病院)



フタトゲチマダニ



\*写真、図は WIKIPEDIA より引用

## 日本における SFTS の流行と最近の話題

国立感染症研究所ウイルス第一部 部長

西條 政幸

2011 年 4 月に中国の河南省や湖北省、北は遼寧省にかけて、ブニヤウイルス科フレボウイルス属に分類される新規ウイルスによる極めて致死率の高い感染症、severe fever with thrombocytopenia syndrome (SFTS, 重症熱性血小板減少症候群), が流行していることが報告された。SFTS は 2013 年にマダニが媒介するウイルス感染症として日本で流行することが確認され、それはダニ媒介性脳炎ウイルス感染症が北海道で流行が確認された 1993 年以後のことである。

2012 年以前に発症し、死亡または重症の経過をとって回復した 11 名の SFTS 患者が確認された。さらに 2013 年には 40 名の、2014 年には 61 名の SFTS 新規患者が報告され、その約 30% の患者が死亡している。SFTS 患者は高齢者に多いこと、西日本において患者発生が確認されていること、患者は 1 月から 3 月の冬期には認められない (少ない) こと、系統樹解析によると日本分離株と中国分離株はそれぞれ独立して進化を遂げていること、等の特徴が明らかにされている。臨床的な特徴として、死亡率が高いこと、マダニの刺咬の既往が確認されていない患者がいること、感染症状に加えて出血症状や意識障害による症状が伴うことが多いこと、そして、骨髓検査により血球貪食症候群の所見が認められることが挙げられる。

本講演では、1993 年に脳炎を発症した患者がダニ媒介性脳炎ウイルス感染症であることが確認された経緯と、日本における SFTS の臨床的・疫学的特徴、さらには私たちが行っている最近の研究成果 (治療・予防法の開発, 分子疫学他) と今後の研究課題に関する考えを紹介したい。